

「動物保護施設のイメージと殺処分について。」

3年1組10番 大田 琉愛

3年3組36番 森本 晴

Keywords: 「保護施設」、「殺処分」、「高齢者」、「イメージ」、「QOL」

1.はじめに

私達は3年間、動物保護施設のイメージと殺処分について探究した。幼い頃から動物が好きだったが、愛犬を迎えた際、ペットショップの店員さんの「返品・交換はできませんが、最後まで一緒にいてあげてください。」という言葉が、強く印象に残ったことがきっかけで探究テーマに決めた。ペットとして迎えられた動物が、飼い主の金銭面、高齢化などが原因で捨てられたり、ペットショップで売れ残ってしまった動物や、保護施設に送られた捨て犬が殺処分されることは社会問題となっているが、一般的な動物保護施設の暗いや怖いといったイメージが明るいイメージに変わると動物殺処分数は減少するのかと疑問に思い「動物保護施設のイメージと殺処分数は関係しているのか。」という問いを立て探究を進めることにした。

2.本論

探究計画としては、周りの現状を知るために校内アンケート、保護施設に訪れたり、世界の言語の先生やネットで他国の現状を調査し、保護施設から聞いた日本の現状と他国の現状の結果とアンケート結果からポスターをつくることを目標にした。

まず海外の現状としてドイツについて調べた。ドイツは犬を保護する法律として、「犬を独りぼっちにして長時間留守番させてはいけない。」「1日最低2回、計3時間以上、屋外へ連れていかなければいけない。」や犬を買うときに育て方講習を受けるなど動物愛護精神が根付いていることがわかった。次に、日本の現状を調査するために「ピースワンコジャパン」という保護施設に実際に伺い、保護施設で行っている取り組みなどについてお話を聞かせてもらった。主に、気をつけていることとして、初めに私たちが記したように保護施設に対して暗く怖いイメージを持っている方が多いという問題を解決するため、飾り付けにポップなカラーを取り入れてみたり、スタッフの印象やご近所さんからの印象に気を付けるよう心がけていると話してくださった。飾り付けの中には、犬への正しい接し方が記載されているポスターがあり、初めて知る知識も多くあった。さらには、Instagramでの活動を積極的に行い、幅広い世代からの注目を集め、動物保護施設の理解度を高めるという取り組みも行っている。スタッフの印象が悪いとわんちゃんたちを見る前に入りにくくなってしまったり、逆にご近所さんからの印象をよくすることで少しでもピースワンコジャパンを訪れようと思ってもらえる人を増やしたいとおっしゃっていた。また、保護施設から犬を引き取ってもらった後の取り組みにも力をいれています。例えば、シニアの犬や病気を抱えている犬にはファミリーサポートといって食費や医療代の7割を負担したり、引き取り後も定期的な現状確認の連絡を取り、飼い主の不安を和らげる取り組みを行っている。私達がこちらの保護施設を訪れて1番印象に残ったことは、人と犬との共存を実現させるため犬のQOLを上げる(人も犬も幸せに)という言葉聞いた時だ。この言葉は一見簡単そうに聞こえるけれど、現状人間の様々な都合で犬の殺処分が進んだりしている現状の日本には最も欠かせない言葉だと思う。

私たちは今回、「保護施設のイメージと殺処分は関係するのか」というテーマで探究を進めた。近年、日本では犬や猫の殺処分数が減少傾向にあるものの、多くの命が失われている現状がある。その背景には、飼い主の無責任な放棄だけでなく、保護施設に対する人々のイメージが影響しているのではないかと考えた。そこで、私たちは実際に保護施設を訪れ、職員の方々に話を伺いながら、施設の実態や地域の人々との関わりについて調査を行った。調査を通して分かったのは、多くの人が「保護施設＝かわいそうな動物が閉じ込められている場所」というネガティブなイ

メージを持っているということだった。そのような印象は、施設の中に入ったことがない人ほど強く持っている傾向があると感じた。しかし実際に訪れてみると、そこには清潔な環境が整えられ、動物たちが安心して暮らせるように工夫されていた。職員の方々は一匹でも多くの命を救うために努力しており、動物たちを「保護する場所」というより、「新しい家族へつなぐ場所」として大切にしていることが分かった。

3. 結論

このような事実を知ることで、私たちは「保護施設のイメージ」が現実とは大きく異なっていることに気づいた。そして、その誤ったイメージが、施設から動物を引き取ろうとする人を減らし、結果的に殺処分を減らす妨げになっている可能性があると考えた。つまり、保護施設に対する社会の見方を変えていくことが、殺処分を減らすための大切な一歩になると考えた。今後は、施設の活動を積極的に発信したり、地域の人々が気軽に見学できるイベントを増やしたりすることが重要だと感じた。特にSNSを通して、実際の保護施設の雰囲気や職員の思いを伝えることは、イメージを変える効果が大きいと考える。私達自身も今回の探究を通して、動物の命を守る活動についての理解が深まり、「かわいそう」ではなく「支えたい」という気持ちに変わった。この学びを通して感じたのは、「イメージ」という目に見えないものが、人の行動や社会に大きく影響しているということだ。保護施設に対する正しい理解と関心を広げていくことが、動物の命を救うことにつながる。これからも一人ひとりが意識を変え、行動していくことが大切だと感じた。

〈参考文献〉

「ペットの殺処分がゼロの国はあるのか(法苑180号)」(新日本法規)2017年 1月 10日

<https://www.sn-hoki.co.jp/articles/article090780/>

